【表現学関連分野の研究動向】

# 英語学

前田　満

英語学の研究分野は近年急速に多様化しつつある。とりわけ統語論分野では、20世紀末から構文文法（Construction Grammar）と呼ばれる潮流が新たに興隆し、現在までに膨大な研究成果が生み出されてきた。とくにA. Goldberg氏の研究は国内でも広く紹介され、多くの研究者の注目を集めている。この流れについては、多くの読者諸氏がすでにご存知のことと思う。今回ご紹介するのは、構文文法それ自体ではなく、むしろ構文文法に関連した新たな展開である。

構文文法の潮流では、基本的に共時的（synchronic）な研究が志向されてきた。一方、近年にいたるまで通時的（diachronic）な研究はまれと言ってよい状況である。筆者はA.Goldberg氏が2009年に来日した際に、通時的な構文研究の可能性についてどう考えているのか思いきって質問してみた。だが、その返答は、もっか通時的研究には関心がないとのがっかりするようなものだった。

だが、ここ十数年のうちに、海外では「通時的構文研究」とでも呼ぶべき研究の動向が生れてきて、研究が続々と発表されるようになってきた。コーパスなどの歴史資料を用いて構文の通時的発達を記述・説明する点は従来のフィロロジカルな研究と同じだが、それに構文文法の理論を加味した点が新しい。構文文法の理論を用いる利点は、構文の発達を意味論・統語論・形態論・語用論といった様々な角度から多元的に分析できる点である。このようなアプローチは、歴史言語学の分野ではまさに画期的なものと言える。

さて、通時的構文研究をリードするのは、J.BybeeやE.C.Traugottといった大御所に加えて、G.Trousdale, M.Hilpert、H.De Smetといった若手研究者たちである。国内では、これらの研究はいまだ認知度が高くないが、海外ではしだいに勢いを増してきている。

この状況にかんがみ、構文の通時的研究に大きな可能性を感ずる者の一人として、筆者はこの分野の研究を日本の研究者に紹介する機会を模索した。すると縁あって秋元実治先生（青山学院大学）の協力を得、2013年に論文集『文法化と構文化』（ひつじ書房）を刊行することができた。本書では、構文文法から通時的構文研究へと至る研究史にふれ、独自の構文化モデルを提案した。また、この論文集には、英語の多様な構文の通時的・共時的研究が収録されている。出版後、多くの方から様々な反響をいただき、筆者としてはまさしく幸甚の至りであった。

また、『文法化と構文化』から数年経過した2015年に、筆者は再び秋元先生とともに続編ともいえる論文集『日英語の文法化と構文化』（ひつじ書房）を出版した。その際、日本語学の分野で構文の通時的研究を精力的に進めておられる青木博史先生（九州大学）にも編集に加わっていただいた。これは英語学と日本語学のコラボレーションを目指した試みで、両分野の研究者が執筆に参加している。

末筆ながら、筆者としてはこの研究分野のさらなる発展のために今後も尽力するつもりである。　（愛知学院大学）